

ることが多く、早朝のテストが終了後は疲れて休んでいる午前中に、寄宿舎までおしかけて来て取材していったりでずいぶん迷惑いたしました。水沢隊では宿直の次の日を渉外係と決めて3人が交代で報道関係と会っておりますので、初めのうちは誰が責任者が判らないらしく、隊員の名前も混乱して新聞の写真に出ている人と名前が違ったりで、毎日の新聞を見て大笑いの種を探すのが楽しみのひとつとなった程でした。日食も間近にせまったある朝私達を呼ぶ声がしますので、又報道陣かと仏頂面して出てみますと、網走市長がお菓子をさげて陣中見舞にこられたところだったというような失敗もありました。

私達のテントを中心にして水路部の反対側の東隣は、NHKの放送基地となりました。焦点距離100cm位のテレビカメラが2台もあって、その一つはぼん踊りの時の檣のような台の上に、もう一つは東西に10m程あるレールの上を走るようになっていて、その他の小型のカメラや撮影機は何台あるのか見当もつかない程で、人数の方は60人と称しておりましたが、途中の中継関係の人も含めると100人を超しているとのことでした。日食をとるのにこのような大がかりの設備はいらないでしょうとたずねてみますと、半分は日食をねらって、半分は私達観測隊を目的にしているとの返答に全く驚きました。我々本職の観測隊が戦争末期の日本軍とすると、NHKは優秀な装備で物量を誇るアメリカ軍と表現すれ

ばピッタリくるような感じで、この力に圧倒されて先方に都合のよい取材に協力させられてしまいました。

日食の前日にカメラの接点の故障していることを発見して、Tさんの超人的な働きで修理をすませるといったヒヤヒヤした事件もありましたが、準備は完了して後は天候の快復を待つだけで日の出を待っておりました。日食当時の状況はテレビでの実況放送を御覧になった方が多いと思います。私達も観測を終ってから再放送を見ましたが、皆既になるまでの雰囲気うまく表現しているのは当然のことですが、日食そのものも本職の観測隊より上手にとれているのではないかと思う位の見事な出来で、私の下手な文章では表現出来ない迫力がありましたので、ここでは省略することにいたします。

テストの時に数回あったような快晴の水平線から上る太陽でなかったため、自信満々のデータを持って帰ることが出来なくて残念でしたが、同じ網走市内でも皆既そのものが霧のため全然見えなかった所さえあった由で、私達の陣どった気象台附近が最も恵まれていたとのことでした。日食が終ってその日のうちに、北海道地方測量部の原口部長が御自分で測量にお出頂いたり、藤田先生が見えられたりして私達は大変恐縮しました。大急ぎで観測器械をかたづけ、加藤先生御夫妻と武田さんに見送られて懐しい思い出の沢山ある網走を離れたのは7月23日夜のことでした。

網走日食観測記

山崎 昭*

7月13日(土)。網走着、早速気象台を訪れ、台長に観測候補地の模様をお聞きする。候補地については事前に東京天文台の秦氏に確保をお願いしてあったので大いに助かった。

あいにく秦氏不在とのことで、早速台長に案内していただく。ここは気象台から300米程東に入った。海に面した高台にあり、東に遠く知床半島を望み、網走港を眼下に見る観測には好適の場所のようである。おまけに隣りは水沢緯度観測所班とあって、電源その他にも万事好都合である。早速台長の案内で近くの水沢班の宿舎に旧知の古川氏を尋ね、電源その他の便宜をお願いする。

午後日通に依頼しておいた観測機材が到着。早速荷解きにかかる。水路部班は森君と小生のたった2名である。しかも今回は、他の班に大分おくれをとったので一刻も無駄に出来ない。報道記者が次々と現われる。荷解

きを8耗にとりたいとのこと。演技も二度、三度と要求されると、少々いらだってくる。

14日(日)。昨日に引続き荷解きにかかる。今日は水沢班も全員顔を揃える。トロヤ方式の35耗撮影機を操る平氏、ニコンの速写を受持つ阿部氏、それに記録と秒読みの古川氏と、既に設営は終り観測の予行練習に余念がない。

午後からいよいよ機械の組み立てにかかる。今回の観測プログラムはスワロフ、ニューギニアの日食同様、太陽-月の接触時刻の決定である。観測方法は新にフラッシュスペクトルの16耗撮影を計画し、リンドブラッドの方法で整約することにしたので機械の調整も中々大変である。

15日(月)。雲で太陽が見えない。当分回復の見込みもなさそうである。遂に水沢の測定した方位マークを使わせて貰うことにする。方位測定後、測台の杭打ちにと

* 水路部

りかかる。夕方宿舎を予約の支庁の寮に替える。昨日あたりから大分冷え込んできた。火鉢をいれてくれる。どうも今年の夏は、北海道でも異常のようだ。夕食に出された見事な帆立貝に舌づつみを打つ。

16日(火)。東京天文台のコロナ観測小屋を訪れる。

ここは気象台のすぐ裏の突き出た崖の縁にあって、狭いながら、報道陣や見物客を避けるにはもってこいの場所である。ニューギニア以来おなじみのコロナ撮影用の四連カメラも、もうすっかり整備が終わっているようだ。

夕刻天文台の大沢先生、水沢の古川氏と市役所を訪れ、市長室にて各報道機関に日食当日の協力方を願う。なかなか結論が出ない。結局全部の報道機関が出揃う18日に再会ということで物分れ。夜天文台の宿舎に古川氏と共に大沢先生を尋ね18日の対策を相談する。

18日(木)。やっと分光儀の組立てを完了。湿気のためか水晶時計の調子が不安定である。16日撮影機のタイミング装置として新に作ったネオン計数管の撮影テストを行なう。今回使用の分光儀はF=12で、頂角30°のSF2対物プリズムを使用、分散は λ 4100Åで97Å/mm、ASA350の富士スーパーパンで毎秒16コマ撮りの予定である。今度の日食は日出直後なので、イクステンクションにより果してフラッシュが見えるかどうか心配である。

19日(金)。午後快晴。13日以来始めて太陽を拝む。急いでコリメーターを使つての露出のテストやファインダーの調整を行なう。ほぼ準備は終わった。ただ日出のテストが出来なかったのが心残りである。

16日に約束した報道記者との会合が、定刻5時を大分過ぎてようやく開かれ、延々2時間の協議の末、やっと当日は3時半迄フラッシュ撮影を認めるという線で妥協する。

20日(土)。いよいよ明日本番である。朝から又雲がふえだした。結局網走入り以来晴れたのは昨日1日だけ、全くついていない。一応機械のセットは終わった。後は運を天にまかすより仕方があるまい。

夕食後、タイミング装置のピント調整の仕上げがまだ残っているので夕方幕に入る。あたりは静まりかえ

て人の気配もない。

21日(日)午前2時。NHKの天幕も急に活気づき始めた。テレビの実況中継のため延二三十人を繰り出したの大観測陣である。

3時。そろそろ東の水平線のあたりが白み始めた。観測隊の最後の取材に駆け廻る記者や、世紀の一瞬を見に群がる人々で、あたりもなんとなく騒々しい。東の水平線には未だ雲が厚い。

3時50分。日出も間近い。観測用意!!

4時2分。突然、雲の切れ間にぼつんと赤い一点が現われたと思うと、それはぐんぐん大きさを増し、遂に三角に歪んだ赤い太陽がその姿を現わし始めた。大急ぎで天幕に飛び込みカメラをセットする。森君のミラーの調整ももどかしい。たった30秒の勝負だ。冷汗がにじむ。スペクトルの赤は見えるが、肝心の紫は弱いためか見えない。刻々時が過ぎる。ファインダーにはどうやら入れた。皆既10秒前!! カメラスタート。続いて一瞬異様なよめきと拍手が何処からともなくおきる。天幕より顔を出すと、一瞬赤黒いコロナが目に飛び込む。皆既は短い、15秒で位置角の変化に合はせたミラー系に切り換えねばならぬ。再びファインダーを覗き込む。どうも弱い光だ。切り換え完了。ほっとため息が洩れる。外に出てみると、既に皆既の終わった太陽が、文字通り中空にかかったダイヤの指輪のように一際さんざんと輝いていた。

5時50分。全スケジュール終了。約束の記者会見を終え、荷造りにとりかかる。

22日(月)。午前荷造完了。午後、網走からバスで40分程のところにある原生花園を見物。ここはトーフツ湖畔に沿い長く続いた草原に群生する自然の花園で、今は赤いハマナスの花が咲き乱れ、あたり一面に甘酸っぱい香りをただよわせている。あいにくの横なぐりの雨で、折角の興趣も大分そがれたが、それでも静まりかえった湖のほとりに点々と草を食む牧牛の姿が、赤いハマナスの原野に映えて旅情をかきたてる。

23日(火)。6時網走発。僅か10日の滞在ではあったが、忘れ難い北国の町に別れを告げる。

雑 報

新彗星ペライラ 1963e 南米コルドバのペライラは

9月14日海蛇座に光度2等の尾のある新彗星を発見した。米国ハリウッドのマックルレーによると頭部の光度6等、真直ぐな淡い10.5度の尾が方位角253度の方角に見られた由である。堂平では18日早朝、薄明のはじまった東の地平線近くの雲の切れ間より光度6等のこ

の彗星が見られたが、尾は薄明のためか確認できなかった。静岡の池谷氏も同日の観測を報告されたが、ゆっくり南西に移動している。初期の主な観測位置を下記する。

1963年9月	世界時	赤経	赤緯	分点	光度	観測地	
14日	9時16.0分	9 ^h 37 ^m 3	-4° 8'	1950	2等	コルドバ	
16	12	—	9 34	-5 12	—	6	ハリウッド
17	19 25.0	9 33.5	-5 40	1950	6	堂平	